

鼠を啖はんことを欲ざるにはあらねど、人を畏るゝことの専なるにあるのみ、願ふにその初め鼠と猫とを馴しむるの時、かりそめにも猫の鼠を啖んとすれば、叱り撃たゝきてこれを懼れしむ、かく嚴く攻らるゝが心にしみて、數月をふるまゝに、遂に猫の心の動くことなく、鼠も亦ならび居るといへども、怛ることなきやうになるなり、こゝに於て己が鼠なるをも忘るゝ、もさもあるべきことぞかし、かくて客至れば主人まづ猫を呼て座に就しむ、次に鼠を出して猫に頭を下げ、あいさつをなさしむるに、猫これに答ること慇懃なるが如し、又鼠一截の肴と酒とを持て猫の前に置くに、猫あいさつをしてその肉を啖ふ、應對のふるまひ鼠との交り、殊になからひあしからず見ゆ、是もとより猫の性ならんや、これ性を枉て發さゝるは、その人を懼るゝが故なり、鼠の又ならび居て怛れざるは、これ習ひ性となるものなり、夫習ひて性となるもの、性を矯て、人に懼れ従ふものは、天地懸隔の違ひといふべし、これによつて猫の性の鼠にまかざるを知れりといふ、澹園初稿予嘗て鼠に躍を習はしむるは、塔壇を火にかけて熱らしめ、さて鼠の後足へ履をはかして、その中へ放ち入るれば、前足のみ徒跣にて熱きに堪えざれば、やがて起て跳るものと、いふ、後には地にさへ放てば、必起て躍るといへり、これ禽獸に藝を教るの術といへり、唐土にも似たることあり、珍珠船に、スツボン教龜鶴舞、亦用此術といへり、

異形猫

〔鹽尻 三十四〕一寶永二年乙酉五月、東都大久保なる所の某の家に、御書物預り川内傳四郎、飼置し猫、二頭六足、二尾灰色毛の子を産せしよし、生れてやがて死けるとかや、

猫飼養法

〔雲萍雜志一〕猫を飼ふもの、多くは猫をやしなふことを去らず、飯をあたふるに鯉ぶしを入れ、肉味を加ふ、猫は常に厚味を食とする時は、鼠をとらず、猫は麥をたきて、味噌汁をかけ與ふべし、その他の食をあたふべからず、常に肉食にならば、肉なき時は、必他の家にいたりて、魚肉を